

平成 29 年 6 月 22 日現在

機関番号：32512

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2011～2016

課題番号：23530680

研究課題名（和文）個人化する社会の「看取り」：その担い手と受け手の日仏比較研究

研究課題名（英文）"End of Life Care" in the Individualizing Societies: A Study on Care Providers and Recipients in Japan and France

研究代表者

佐藤 典子（SATO, Noriko）

千葉経済大学・経済学部・准教授

研究者番号：10401580

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000 円

研究成果の概要（和文）：「ケアの受け手の個人化」特に、独居の増加（日仏）に関しては、フランスでは近年、「寄り添い（accompagnement）」と「連帯」の対象とみなされるようになり、「ユマニテ」の伝統が機能していること、日本では家族中心の介護のため、遠隔地介護による子の離職や老老介護などが明らかになった。「ケアの担い手の需要増加」に関しては、日本では過重労働（若年看護師の過労死、残業、10万人離職）がケアのジェンダー化に起因し、専門職化の一方で、女性役割への期待から待遇の問題として見えにくいと考えた。また、フランスではケアの細分化が行われ、単純労働を移民の子女が担当するなど条件悪化や質も問題となっている。

研究成果の概要（英文）：Through "Individualization of care recipients" studies, focusing on increasing number of elderly people living alone in Japan and France, we came to conclusion as follows; In France, they are considered as subjects of "accompagnement" and "solidarity" so that their tradition of "humanity" is functioning. In Japan, because the elder's family play central roles in their caretaking, the remotely living juniors may leave their jobs and the seniors may be tired of their parents. As "Increasing demand for care providers" study, we consider nurses' heavy workloads in Japan which cause young generations' death from work, poorly improved overtime and 100,000 turnovers per year is due to gendered nursing care that is also specialized; they try to. Also in France, we recognize that fragmentation of care procedures allows immigrant children to get unskillful jobs and causes deterioration of job conditions and quality. meet the expected women's role not realizing their poor working conditions.

研究分野：社会学 ジェンダー論 労働問題 高齢者福祉 家族関係

キーワード：2025年問題 ケア 女性の働き方 家族のケア 高齢社会 高齢化率 健康寿命

1. 研究開始当初の背景

個人化する社会において、人は、有縁を不自由と感じ、そこから脱することを願い、家族や地域との関わりも避け、それは、さまざまな社会サービスによって可能となった。従来、親子、子弟、君主と民衆などの人間関係が共同体においてなされる営みを、貨幣によって賄える社会へと変えてきた。現代の無縁社会の姿である。それが、貧困や格差がことさら強調される社会になることで負の状況として目立つようになったのであろう。無縁社会は、イエ、親類縁者、地縁といった「**くびき**」からの解放でもあった。それは、ゲマインシャフトからの脱却であり、贈与経済からゲゼルシャフトとして利害を一にする貨幣経済の普遍化への道程でもある。

そのような中、かつて予想された以上に、人々の高齢化は進み、「**看取り**」の需要は高まっている。しかし、看護職などのケアの担い手としての昨今の業務の多忙化・煩雑化は、本来の中心的な職務であるはずの全人的ケアそのものが困難となり、看護職者自身の職業生活を、圧迫している。そもそも、看護職者の重要性の認識は高まり、それと同時に、専門化しているが、実際の看護職者の働く環境の整備が不十分であるのはなぜか。

一方、実際の介護は、病院や施設などのみで賄われるのではなく、やはり、近親者、家族の手によって行われるはずと考えられている。「**看取り**」の担い手である**職業者と家族、そして、受け手**である者は、「無縁社会」と呼ばれる現代の日本において、どのように相互扶助を行っていくのかについて三者の立場から考えていきたい。

<これまでの研究動向及び位置づけ>

現在、目に見える地縁や血縁を忌避する一方、SNSなどにその代替を求め、それらが機能すると考えられている向きもあるが、しかし、それらは、当事者に余裕がある時には機能するであろうが、かつての共同体の縁と

違い、「嫌になったらいつでも辞められる」都合のいい縁でしかない。つまり、よい時はよいが、困ったときに必ず助けてくれるとは限らず、社会的紐帯のための縁として機能しないこともあるのだ。一方、家族や血縁という概念が包括しているのは、家族は「幸せなものである」というフィクション、残っているのかどうか分からない、「家制度」や「共同体」の存在であり、実体としては、冠婚葬祭以外にも、**家族が社会保障を担うもの**と考えられている。すなわち、制度の問題は今や自己責任論へすり替えられているのだ。社会システム上、相互扶助が不可能であっても、それは、個人の問題となってしまう。P・ブラウは、社会的相互行為論の系譜で交換の原理を「他者Bに対する報酬となるサービスを提供する個人Aは、その他者Bに義務を負わせる。この義務を果たすためにはBはお返しとしてAに利益を提供しなくてはならない」（Blau [1964=1974]: 81）と定義する。経済的交換は、サービスや財を貨幣と交換し、交換対象の質や量が決定しているが、社会的交換には、ハビトゥスによって一定のルールがあるものの、明確な決まりはない。よって、文化や慣習、価値観を共有せず、相互行為を継続することは困難となる。現在、**グローバル化**によってその傾向に拍車がかかっていると言える。とはいえ、無縁社会は、こうした相互扶助の関係が断ち切られた社会である。そして、それは、高齢社会にもなっているのだ。高齢化が進むにつれて、ケアの需要は年々増加しているといつて良い。しかし、2004年の「看護職員需給状況調査」で、保健師・助産師・看護師の離職率は、平均で11.6%となっている。さらに、若い看護職者が、80時間の残業を行い、2007年、当直明けの看護師（24）が致死性不整脈で、2008年、看護師（25）が、くも膜下出血で、過労死する事態が発生し、公務災害と認定されている。これを受けて、日本看護協会は「**時間外勤務・夜**

勤・交代性勤務等緊急実態調査」を行い、看護師 2 万人が月 60 時間以上の残業を行い、**過労死危険レベル**にさらされている状況にあり、とくに、新卒看護職者の離職率が全国的に高く、20 代の時間外勤務が長いと発表した（「2008 年病院における看護職員需給状況等調査結果速報」2009 年 6 月 16 日日本看護協会 HP より）。そこには、制度的な変更だけでは解決できない、構造的要因があると考えられる。

2．研究の目的

昨今、「**無縁社会**」という語が囃われ、**血縁、地縁のない者の孤独な生活や死**が増加したと言われている。老いた者が子供ではなく、社会保障や金融資産に頼る傾向は、福祉国家の必然の成り行きだが、一方で、内閣府の調査（平成 19 年度）において、多くの人が一番大事なものは家族と答えてもいる。そのような中で、「**看取り**」は、どのようなになっているのか。「看取り」の中心的な担い手である**看護職の働き方**にいかなる影響をもたらしたのか、一方で、その受け手とその家族は、**個人化する日本社会**において何がどう変わるのか。日本と同様に高齢社会で看護需要の高いフランスを比較対象として考察したい。

3．研究の方法

文献による情報収集と現状を把握するための**調査（聞き取りと質問紙）**を行う。

前半は、主に、「無縁社会」の現状分析のため、文献による情報収集と分析、翌年以降の本調査のための予備調査として、日本とフランスの研究協力者へのインタビュー調査などを中心的に行う。

後半には、前年度までの結果を踏まえて、フランスとの共通点と相違点を見出したい。

最初に、現状分析を行う。本調査の予備調査として、研究協力者である看護師や家族、患者に聞き取り調査を行ない、問題点を明らかにする。

まず、「無縁社会」は、なぜ、生まれたのかについて考えてみたい。現在は、絆がなくても生きていける社会である。人々は、自立を求めて、孤立を与えられる。ワーキングプアは、無縁社会の下地となり、もはや、彼らは、搾取の対象ですらなく、排除の対象となっている。社会の居場所づくりとして、社会の死角に落ち込む人をなくすることが重要と考えられているが、そもそも、現在の若者は、単身者としての生活が居心地よいと言っており、すでに無縁化予備軍と言えるだろう。そのような中で、われわれは、社会の中で、何が起き、今後、何を求めているのかを精査していかななくてはならない。そのために、世代別の意識調査と、少子化を脱却しつつ、**高齢化するフランス社会との比較**を行う。まず、

統計や文献による現状の把握と両国間の家族観、共同体への信頼と連帯についての意識比較、次に、の結果がどのような歴史的過程を経て生じてきたのかについての検証などである。

先行研究を把握した後に、現代の医療問題を鑑みて、医療組織の中で、看護職者がどのように働き、他の医療職者とどのように協働しているのか、就労の状況とその意識などを見ていく。とくに、翌年度の本調査に向けて、質問紙を作成する上で、聞くべきことを整理するための**予備調査**を行う。

また、**プレカリテの状況**についての検証を行う。ベックによれば、近代における基本的な社会的諸制度は、社会にとっても個人にとっても効果がないか、機能障害を起こすようになった。要するに、産業社会的近代において制度的・規範的に自明であった事柄がプレカリアスになっている。この分析に当たって、文献を精読し、**個人化する社会**について考える。

中盤には、主に、ケアの担い手の研究を主に行う。看護職の働き方の要件（公立病院・

私立の別、専門病院・総合の別など）と属性の要件（年齢層、キャリア、専門性、都市部・地方の別など）などを加味した調査を行う。とりわけ、医療組織において、看護職者がその職能を十分に発揮できない、阻害要因を見つけることを主眼に起きたいと思う。というのは、経験の少ない、低賃金の若手看護師の勤務時間が長く、経験があったとしても、給与にキャリアが反映されていないという現状があり、それによって、看護サービスの向上には、看護師個人の努力に依存しているといえるが、それは、なぜ可能なのかについて考察が行われていないからである。

次に、これまでの調査によって得られた知見から、看護職は、医療職の中で、どのような働きをして、また、いかにして自らのキャリアを活かし、医療職として、社会にその働きを最大限に還元していくことができるのか、また、個人化された生活史は、**グローバル化された世界のシステムの矛盾**をいかにして耐え抜かなければならなくなったのかを考える。個人は、職業の生活史、愛情の生活史、ジェンダーの生活史、家族の生活史、といった壊れやすい生活史を個人化された諸矛盾、強制、目標、ライフコースの諸概念をつかって「うまく乗り切る」ことを強いられていると感じることが多くなっている。こうした現状を鑑みて、**日仏比較**の観点を踏まえて、何らかの提言を行うことができればと思う。

4．研究成果

社会全体の効率化によって、無縁社会を情緒的に悲観する半面、閉鎖的な相互扶助は決して肯定されていない。そこで、生活や労働の「不安定さ」を表わす、「**プレカリテ**（*précarité*）」「**プレケール**（*précaire*、形容詞）」という語をキーワードにして、不安定な状況が生活を脅かし、安定した生活から遠ざけている原因を考察した（CINGOLANI,

Patrick., *LA PRÉCARITÉ*, Que sais-je? No.3720, Puf, 2006.）。これまで、プレカリテという文脈では、雇用そのものの不安定さなどが論じられてきたが、**社会から孤立してしまう環境にある人々**、生活基盤そのものを奪われる機会のあるわが国のケアワークも、ある種のプレケールな状況と言えるのではないだろうか。当然のことながら、労働の不安定化は、ケアを提供する側もされる側にとっても大きな損失となることは言を俟たない。ケアワーカーに限らず、失業率が悪化していく過程で若年層及び、女性の労働環境は一層厳しいものになっている。家族がその家族の「看取り」をしたくても、自分のことで精いっぱいになる状況は多々ある。正規雇用が得られない場合や、正規雇用であっても、多くの残業が強いられる。そこで、世界的なプレケールな状況を比較しながら、そのあり方を考えてみた。とりわけ、ケアの労働において、2006年度の診療報酬の改定で看護職者の需要増があったとき、若手雇用によって賃金を低下させる経営メリットを優先させたのだが、看護師の技能評価を問わない診療報酬制度によって、より多忙になった（「時間外勤務、夜勤、交代制勤務等緊急実態調査」日本看護協会 2008 年 11 月～2009 年 1 月）。とくに、周辺業務つまり、配膳、残食チェック、ベッドメイキング、心電図モニターの保守点検など（日本看護協会『病院看護基礎調査』1999）によって多忙となっていることがわかる。こうした環境では、単なる数としての需要を満たすだけではなく、質を高めることはいかにして可能なのか。また、その間に立つ存在と考えられている家族やその性別役割は近代の鍵となる制度および主導的理念であるが、その社会的機能を果たす上で、さらに**社会的行為を安定化する際の個人的有用性において、ますます不可逆的に弱体化しているように見える**（Beck 183; Beck-Gernsheim 1983）。その諸関係を社

会はどのように考えているのか見ていった。

そこで得られた成果が以下2点である。

(1) ケアの受け手の個人化と家族の問題

近年の世界的な高齢化率の上昇において**独居の増加**(日仏)が問題となっていたが、フランスでは、近年、「**寄り添い**(accompagnement)」と「**連帯**」の対象と考えられるようになり、「ユマニテ」を重視する伝統が機能していることが聞き取り調査から分かった。日本では、『**国民生活白書**』(平成19年度)において、一番大事なものは家族と答えていることから明らかなように、自治体の介護申請などは家族中心に行われ、公的な医療・介護サービスの限界は家族の補完が前提である。そこで、**ケアの担い手**である職業者と家族、そして、**受け手**はどのように相互行為を行っているのか三者の質問紙調査、聞き取り調査を行った。そこでは、遠隔地介護の限界による子世代の離職や親子世代の同時高齢化による介護疲弊などが明らかになった。また、勉強会、読書会では**専用HP**にて告知して参加者を募り、多くの方と問題を共有し、かつ新たな問題把握ができた。

(2) ケアの担い手の需要増加+専門化(日)と細分化(仏)

本調査では、日本では、**若年看護師が過労死**(2007年08年)し、2万人の「過労死危険レベル」残業が改善できず、毎年、**10万人の看護師が離職**していることから、過労になるまでケアを行う原因を、看護職が**ジェンダー化**されていることとの因果関係から探っている。日本看護協会等のアンケート調査と厚生労働省におけるさまざまな統計結果の分析、申請者の行っている質問紙調査と質的調査(聞き取り調査)の分析から明らかにされるその理由の一端は、**看護の専門化**の一方で、担い手の多くが女性(日本は95%)で、医療と看護の性分業過程で得た**女性役割**を踏襲し[佐藤典子:2009=16]その母性的価値観は献身的ゆえに**過重労働**になりやす

く、かつ、待遇の問題として自覚化、**顕在化しにくい構造的な要因**にあるとの仮説が証明されてきている。また、フランスでは、ケアがジェンダー化されているだけでなく、**ケアの細分化**が行われ、単純化された労働は**移民の子女**が担当するなど、労働条件の悪化やケアの質の担保なども問題となっている。どちらにも共通することは、女性性の獲得という点で、**ブルデューの「象徴資本」**概念の「**純粋な利益にとらわれない利益**」と言える。自らの生命を賭して仕事を行う動機づけは、**女性性ゆえの献身の美徳**という価値観が象徴資本として生命すら上回っているのであり、伝統的な社会で命を捨てて**名誉を獲得**することの一例である[佐藤典子:2007=09=16]。そして、看護職にとって昨今の業務の多忙化・煩雑化は、本来の中心的な職務である**全人的ケア**を困難にさせ、**職業生活を圧迫**していることが明らかになった。

また、**フランスでの調査と発表**を当初予定していたが、相次ぐテロによる渡航自粛要請を受け、最終年度では、研究の延長も行ったものの、状況は悪化し、現地に直接赴いての調査はかなわなかったが、インターネットなどを駆使して、現地協力者との連絡を密に取り、フランスの医療の現状や制度についての資料収集などが可能となった。

5. 主な発表論文等(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 4件)

佐藤典子「地域社会と社会空間:境界性の円環とアイデンティティ」、『社会学史研究』、査読有、第39号、2017年、PP.47-59

佐藤典子「超高齢社会日本の現状:長生き社会日本とケアの実情」、『千葉経済論叢』、査読無、第56号、2017年、PP.21-32

佐藤典子「2025年問題と看護師の過労・離職の現状」、『千葉経済論叢』、査読無、第52号、2015年、PP.1-23

佐藤典子「フランスの福祉に関する研究

医療・家族・高齢者・若者・移民』、『日
仏社会学年報』、査読有、第 24 号、2013 年、
PP. 39 - 54

〔学会発表等〕(計 7 件)

佐藤典子、「超高齢社会におけるワークラ
イフバランスとケア 超高齢社会におけ
る日本の現状：長生き社会日本とケアの実
情」、千葉経済大学地域総合研究所、2016 年
11 月 26 日、千葉経済大学(千葉県・千葉市)

佐藤典子、「社会学理論の最前線 空間」
「『社会空間』と『場』の理論から考える境
界性の円環とアイデンティティ」、日本社会
学史学会、2016 年 6 月 24 日、東京女子大学
(東京都・杉並区)

佐藤典子、「超高齢社会と看護師の過労」、
NHK 技術研究所・展示、2016 年 1 月 26 日、
NHK 技術研究所(東京都・世田谷区)

佐藤典子、「いのち・病・障がいの社会学
現代フランスの福祉・医療制度と実践の事
例から」、日仏社会学会、2015 年 10 月 17 日、
横浜国立大学(神奈川県・横浜市)

佐藤典子、「時間が社会生活にもたらすも
の」、日仏社会学会、2012 年 11 月 17 日、西
南学院大学(福岡県・福岡市)

佐藤典子、「看護師の過労とその要因」、
日本社会学会、2012 年 11 月 3 日、札幌学院
大学(北海道・江別市)

佐藤典子、発表「個人化する社会のケア：
「担い手」と「受け手」の関係から」、日本
社会学会、2011 年 9 月 17 日、関西大学(大
阪府・吹田市)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
<http://www.cku.ac.jp/sato/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者
佐藤 典子(SATO Noriko)
千葉経済大学・経済学科・准教授

研究者番号：10401580

(2) 研究分担者 なし
()

研究者番号：

(3) 連携研究者 なし
()

研究者番号：

(4) 研究協力者 なし
()